

越境する悪女

They Stooped to Folly におけるグラスゴウの時代意識

今井加寿

I

批評家の間で圧倒的支持を得た (Scura xxviii) *Barren Ground* (1925) 出版の翌年から、Ellen Glasgow (1873-1945) は、3年の間隔でいわゆる Queenborough Trilogy と呼ばれる3部作を発表した¹⁾。3作品とも場所を Virginia 州の Queenborough という町に、時代を第一次世界大戦後の1920年代に限定し、様々な女性を提示している。特にこの3作品に一貫して Glasgow がテーマとするのは結婚以前、或いは婚外に性的交渉を持った、いわゆる「堕ちた女」たちの生きざまである。

Glasgow の描く「堕ちた女」(“ruined woman” または “fallen woman”) とは、「若いときに恋人がいたが、裏切られ、その結果にひとりで立ち向かわねばならない者」(Ekman 84) である。南部ヴィクトリア朝時代の理想主義は女性の美德として性的純潔を至上命令とした。婚外の性的交渉が女性のすべての罪の中で一番邪悪であった時代、「堕ちた女」は生涯許されない罪を背負って生きていかねばならなかった。社会からは白眼視され人目を避けて暮らさねばならなかった。更に裏切られた男の名前は決して明かしてはならず (Ekman 84)、常にその罪を担うのは女性だけであり、男性は何ら罪に問われることはなかった。このように南部では男性に都合の良い道徳規範が社会を規制し、それを女性達も認めていたのである。

本稿では Glasgow 52歳の時の作品 *They Stooped to Folly* (1929) を取り上げ、第一次大戦後の Virginia 州における「堕ちた女」たちを Glasgow はどのように描出しているか、また作品の舞台となる1920年代に対する Glasgow の時代意識を考察する。

II

Now, it is the peculiar distinction of all woman myths that they were not only sanctioned but invented by man. Into their creation have entered many of the major prejudices and a few of the minor prerogatives of the male sex²⁾.

Glasgow は1938年にそれまでの主要な12作品を Virginia 版全集として出版しているが、その *They Stooped to Folly* の序文で、このように「昔から存在する女性神話は男の産物である」と述べている。女性が子供を産み、食を整え、育てている間にこの世は男性によって造り出された宇宙観に支配されるようになったと言う。さらに男性によって作られた神話において、女性は大きく二つの類型に分類されるようになったと述べている。即ち、「生きる活力を与える存在としての女性」(“woman as an inspiration”) そして「障害となる存在としての女性」(“woman as an impediment”) である。Glasgow のこの指摘は後にフェミニズム批評家らに

よって体系づけられることになる文学上の女性の類型を既に明確化するものであった³。つまり、19世紀ヴィクトリア朝時代の家父長制度は女性像を、家庭の「天使」即ち「善い女性」とそれと対極をなす「妖怪、魔女」即ち「邪悪な女性」とに分類した。「善い女性」と「邪悪な女性」という極端な分極化は、生きた女性像から程遠い歪められた像と言える。Queenborough TrilogyにおいてGlasgowが取り上げたテーマはまさに障害となる「邪悪な女性」、「墮ちた女」であった。そしてこの「墮ちた女」の神話こそ男性の産物であると序文においてさらに次のように語る。

Thus I mused, in a whimsical reverie, until the ironic spirit at my elbow proffered me the almost forgotten myth of the 'ruined woman'. Here, I perceived at a glance, was the subject I needed. Here was sentiment; here was chivalry; here was moral tradition; here was a well-honored invention of man. (xvii)

生涯罪を背負って生きていかねばならない「墮ちた女」たちは伝統的南部社会において、「邪悪な女」として固定化された。しかし、「墮ちた女」即ち「邪悪な女」は「罪を償うために生涯痛恨の人生を送るべきもの」という定型化された言説はもはや1920年代のVirginia州において、現実を歪めるものであることをGlasgowは確信していた。Glasgowはこの男性支配社会が作り上げた形骸化された女性像を壊し、実像に迫ろうとする。伝統を重んじるVirginia州のQueenboroughにも、1920年代、新しい時代の風が吹き始める。「墮ちた女」は「新しい女性」(New Woman)となり、自ら悪女の境界を越えていったのである。

III

They Stooped to Folly は第一次大戦から5年後のVirginia州Queenboroughを舞台としている。確かに1920年代は「ロスト・ジェネレーション」、「ジャズ・エイジ」、「狂乱の時代」、「禁酒法時代」などアメリカ文学史・社会史上で様々な呼び名を有する特殊な時代と言えよう。小笠原氏は1920年代についてアメリカ青年たちの「死とセックスという根本的な現実」に直面した戦争体験が、彼らの故郷共同体の規範・価値観からの「離脱」をもたらし、「ヴィクトリアニズムへの反逆」の時代をもたらしたことを指摘している(75)。Glasgowは*They Stooped to Folly*の序文で、第一次世界大戦がVirginia州にもたらした影響、特に人々の心理状態の揺らぎに触れ、この時期、伝統的基準が見捨てられ、価値が歪められ、世界は混乱の状態にあったと述べている(xix)。また作品中で、伝統的価値基準の代弁者としての機能を担うLittlepage氏に、大戦後の価値観の揺らぎの原因はヨーロッパの頹廢がVirginia州に及んだせいだと感じさせている(18)。

また1895年から1920年はアメリカ史上いわゆる革新主義時代とされている(Norton 98)。1890年代の深刻な不況は社会不安を生み、社会改革への気運が高まった。急速な産業化とそれに伴う都市化は繁栄と裏腹に、貧困、病気、犯罪、政治腐敗を拡大したのである。革新主義者達は権力の乱用に抗議し、社会制度を改革しようと政治活動を展開した。社会改革の気運は女性達の間にも広まり、1848年セネカフォールズに始まった女性運動は奴隷解放運動を経て、1920年の婦人参政権を規定する憲法修正19条の各州の批准をもって一応の終結をみる。女性達は参政権は得たものの政治への直接的参加は実際には少なく(98)、彼女達のエネルギーは社会奉仕活動へと向かっていった。Anne Firor Scottは*The Southern Lady: from Pedestal to Politics 1830-1930*の中で、南北戦争後の少子化、工業・産業の進歩による家事の合理化などが都市部の中流階

級の女性達に余暇時間を与え、彼女達は教会を通じての社会奉仕活動に積極的に参加するようになったと述べている (135)。特に Women's Christian Temperance Movement に代表されるような、いわゆる“club woman”と呼ばれる女性達が「神の労働力」(141) となって精力的に社会活動に参加して行った。その中で“fallen women”に関する問題も取り上げられるようになったという (160)。 *They Stood to Folly* に描かれる女性達は第一次大戦中の赤十字活動や都市の貧困者を救うための活動に参加したこのような女性達である。Mrs. Dalrymple は欧州で救急車を運転しながら病院建設に貢献し、Mary Victoria は赤十字活動のためバルカン半島とアメリカを往来し、模範的な南部淑女である彼女の母親 Victoria やその友人の Louisa は、様々な改革運動に参加したり (10)、恵まれない女性・子供達を助ける“House of Hope” (165) での奉仕活動に忙しい。

婦人参政権の獲得は女性の地位を男性と平等にすることを意図するものであった。実際には平等になるはずはなかったが、1920年代確かに女性の地位は向上し、女性らしさのイメージに変化が生じた。Mary Beth Norton によれば、当時流行した短いスカートに短い巻き毛のヘアスタイルは、性の自由を象徴するものと見なされ、中産階級の女子学生や、店員、事務職員のあいだで普通に見かけられるようになった。いわゆる「フラッパー」と呼ばれる女性の出現である。いくつかの調査によれば婚前交渉のような新しい性の試みをすることが、この時代の若い女性の間で増えていたという (Norton 293)。こうした社会的変化に伴い、性の領域においても南部女性に意識変化が見られ、女性自身も性的自己決定権を有する立場を明らかにしていく。Scott によれば医療の進歩により、避妊法や薬の知識が広まり、女性の性意識が変化したことが述べられている (213)。このころ Margaret Sanger (1883-1966) は女性たちが性から解放されることを唱え、1921年にアメリカ産児調整同盟を設立し、1927年にはジュネーブで第一回世界人口会議を開催し、多くの女性に産児調節の知識と方法を広め、女性の性的自己決定権の権利を唱え、性的自立を実現しようとした (Freedman 182)。Glasgow は三部作において、このような女性を取り巻く社会の動きと環境の変化という時代意識をもって、新しい南部女性像の現実を描こうとしたのである。

IV

They Stood to Folly は第一部では57才の弁護士 Littlepage 氏の視点を中心に3人の「墮ちた女」たちの生きざまが提示される。Littlepage 氏は南部の伝統的規範が崩れて行く中で南部紳士としての規範を守って来た理想主義者であり、作品の中で南部社会の道德規範の代弁者として機能している。しかし伝統的規範の中に閉じこめられ、自由を失った自分の人生に、社会的には成功したものの、内面的には何か満たされないものを感じ、憂鬱さを拭えない。その Littlepage 氏のもとへ、欧州で赤十字活動をしていた最愛の娘 Mary Victoria が突然結婚して夫 Martin Welding とともに帰国することになる。実はその夫は Littlepage 氏の秘書 Milly Burden の元の恋人であり、Milly のために、欧州に行ってしまった恋人の Martin を娘に探すように頼んだのは Littlepage 氏であった。その Mary Victoria が、探し当てた Martin に憐憫の情を抱くうちに、二人は結ばれ、結婚し、帰国したのであった。

Glasgow は *They Stood to Folly* 中の「墮ちた女」たちを年代別に3人描出している。65歳の Aunt Agatha、50歳過ぎの Dalrymple 夫人、24歳の Milly Burden であり、それぞれ

1870年代、1890年代、1920年代に恋人達に裏切られた「堕ちた女」たちである。世代の違う「堕ちた女」たちの違いを描きながら、Glasgow はそれぞれの時代の変化を提示している。

Littlepage 氏の周りには「堕ちた女」の一人は1870年代に恋人に裏切られた Aunt Agatha である。Littlepage 氏の叔母にあたり、Littlepage 氏の屋敷の最上階に40年以上、あたかも“Life imprisonment” (109) のように暮らしていた。「罪の意識に身を包み、永遠の未亡人」(6) となったのである。当時結婚せずして純潔を失ってしまった女たちは小さな部屋に閉じこもり、公的な場所にはいっさい出ることはなかった (Ekman 84)。「古い慣習によれば不名誉をさせられた真の女性は墓場まで罪の秘密を持ち続け」(96) なければならなかったのである。さらに周囲の南部女性達からも無視される存在であった (Scott 160)。Milly の母親で、極端なまでにカルヴィニズム的道德観を保持し続けている Burden 夫人によれば、当時としてはそれが当然の社会規範であることをが次のように語られる—「罪を犯した女性は一生その罪から逃れられない。世間から身を隠し、隠遁生活を送るのが道徳的行為」(106) なのである。さらに南部の因習は「堕ちた女はそのまま堕ちているべき」であって、「罪から解放されることは不道徳」(106) なことであると言う。隠遁生活を送りながら生涯悔恨のうちに過ごす事が罪から救われる唯一の道だと信じられていたのである。このような社会規範に服従し、40年以上もの間、世間の噂に耐え、潔く独身者として、隠遁生活を送る Aunt Agatha は19世紀の「完璧な堕ちた南部淑女」(106) であった。この間、いかなる男達も Aunt Agatha に近づく勇気はなかった (139)。しかしこの叔母も第一次世界大戦によって変化を見せる。つまり、第一次世界大戦中に、世間から身を隠すことを止め、負傷兵のパジャマを縫う赤十字の奉仕活動に参加するようになる。さらに舞台となる1924年になっては映画館へ出かけたり、バナナサンデーなどの甘いものを食したりと人生を楽しんでいるかのように変化を見せる。体型を保つために食べるものすら制限されていた南部の女性達が自由になっていく様子を Aunt Agatha 自身がこう語る。「50年前、淑女はチキンの羽の部分を好んで食べたわ。そこは“dark meat” とよばれるところだった。今はどこを食べてもいいのね」(140)。

Littlepage 氏の周りには「堕ちた女」の二人目は50才もすぎた中年女性 Amy Dalrymple である。Littlepage 氏の目には「まぎれもなく軽薄だが魅力的で、素晴らしく女性的で、夫と死別したにもかかわらず、陽気そう」(14) な女性であった。彼女は最初の結婚の時に不倫を働き、離婚されたが、その愛人は「真面目で非のうちどころのない淑女と結婚してしまった」(14) のであった。Queenborough の人々にはスキャンダルのヒロインとしていつも噂のまとなり、「魅力的だが尊敬されない女」(255) とされていた。その後運良く再婚するが、その夫にも先立たれ、今は未亡人である。12年程前、Littlepage 氏は離婚訴訟の弁護を頼まれた関係で親しくなり、彼女の「かよわさ」(260) や「豊かな胸」(256) に魅力を感じていた。“Deeply wrong poor lady” (17) ではあるが、Aunt Agatha のように閉じこもり、独身を貫くこともなく、本人はいつも生き生きと魅力的であった。第一次大戦中も異性関係のゴシップは絶えないまま、欧州で病院の設立などに大いに貢献し、功績を称える勲章も得ていた。Glasgow は Dalrymple 夫人を南部淑女らしい美しさとかよわさを持つ女性として品位をおとしめることなくあくまでも魅力的に描いている。しかしこの Dalrymple 夫人も南部淑女らしい魅力も色褪せ、過去のものであることが Littlepage 氏によって次のように語られる。

And then, gradually and imperceptibly, tasted had altered, and the late-Victorian ideal of beauty had gone out of fashion. Vanished also, or surviving with a faded splendor was the brilliant archness, the irresistible coquetry, which had turned the nimble or less solid wits of the nineteenth century. Yes, the truth was (he perceived this in the very act of denying it) that she had had her long and glorious day and was now ending. Never again, except in the delusive pages of fiction, would the great Victorian ideal inflame the emotions and the imaginations of men. (261)

Littlepage 氏の周囲に存在するもう一人の「墮ちた女」が秘書の Milly Burden である。「女性の罪の意識を無造作な近代風に、或いは男性的な手触りで扱って」(5) いる女性である。6 年前に Martin Welding と交際をしていたが、戦争で彼はヨーロッパに渡り、その後行方が分からなくなっていた。Littlepage 氏は南部紳士らしい親切心から当時ヨーロッパで博愛活動に従事していた娘の Mary Victoria に Martin を探すように依頼する。19才だった Milly は妊娠していたが、Martin には告げていない。「Aunt Agatha は純潔を喪失したことを悲しんでいたが Milly は恋人の喪失を悲しんで」(6) いるだけで、妊娠について悩むより彼に会えないことを悩み、罪の意識はない。Littlepage 氏は「結局墮ちた女にするのは女の罪の意識なのだろうか」(6) と思う。Littlepage 氏の心配をよそに「私は彼に会いたい。いつだって彼に会いたいよ」(21) と宣言する Milly の意志は明確であり、「フェアプレイにゲームをするかぎり私は幸せになる権利があるわ。私の人生は私のもの。私自身が傷ついたりしても私以外の誰も傷つけはしないわ」(22) と断固と主張する。

新しい女性 Milly は、古い価値観をひきずり、いつも「幸せは不道德だ」(23) と言っている母を批判する。母親は南部の古い価値観を信じ、結婚とは喜びや楽しみではなく、義務であり、喜びや幸せを求めることは不道德であるとさえ考えている。「私は義務という言葉を軽蔑するわ」(252) という Milly は「お母さんのせいで私の人生は台無しになった」と母親を責める。7 人の子を出産し、6 人を亡くし、夫にも逃げられた母親を Milly は好きになれず、偏狭な規範を娘にも強要するこの母から離れようとする。伝統的価値基準の代弁者として機能している Littlepage 氏は母親のことを理解しようとしないう Milly を「家族を思いやる気持ちがないのは妖怪だけだ」(252) と言って「妖怪」扱いする。これに対して Milly は「じゃ多分わたしは妖怪ね。でもたとえ私が妖怪だとしても、私は現実に生きているわ」(252) と現実に生きることの大切さを説く。Littlepage 氏はこの Milly の態度を伝統的道德規範の欠如した自分の兄、Marmaduke の態度と重ね合わせる。戦争で片足をなくし、女性の裸体を描いている売れない画家 Marmaduke は戦争に行き性格も変わり、放蕩の生活をするようになった。Littlepage 氏は第一次世界大戦によるアメリカとヨーロッパとの人的交流が Virginia 州に道徳的頹廃をもたらし、Marmaduke や Milly の道徳的欠落を招いたと考える (18)。

Milly はヨーロッパへ戦争に行った Martin に妊娠と赤ん坊の死のことを知らせなかった。「彼には幸せな思い出だけ持って欲しかったの。余計な思いはさせたくなかった」(27) という。彼女の母親は「墮ちた女」は「悔い改めによってしか罪から救われない」と言うが、Milly は「私の人生は私のもの。何の後悔もない」(107) と言い、全く反省の色もない。妊娠が結局死産に終わったことにも Milly は悲しむ様子はない。

このように Milly は Littlepage 氏に「妖怪」扱いされる程、それまでの規範から逸脱した女性として描かれている。Glasgow は、仕事を持ち、自由な意志を持って人を愛し、婚姻という制度にとらわれることなく性的関係を持つ Milly を描くことによって、1920年代に Virginia 州に出現した「新しい女性」を提示したのである。

V

以上のように新しい世代の Milly の態度がそれまでの世代の二人の「墮ちた女」たち、Aunt Agatha と Dalrymple 夫人の態度と違う様子を描き、Glasgow は1920年代の Virginia 州の新しい女性像を提示している。様々な呼び名を持つ1920年代が確かにアメリカ都市部の文化に大きな変化をもたらしたことは多くの歴史家の指摘するところである。女性の社会進出は婚前交渉、避妊、飲酒、喫煙、そして古い価値観の軽蔑という現象を伴って「道徳革命」をもたらした (Freedman 186)。派手に自由をアピールしようという「フラッパー」たちが世界の目をひいたのも事実である (Freedman 186)。しかし「新しい女性」として提示された Milly はただ軽薄な「フラッパー」ではない。Milly は母親の古い価値観に反発し、「墮ちた女」としての罪の意識を持たず、仕事を持って自立して生きようとする。「私の人生は私のもの。決して後悔はしない」(107) とくり返し、Martin ひとりを愛し続け、彼に心配をかけまいとして妊娠のことも死産のことも言わず、ひたすら帰りを待っている。つまり、自己中心的ではあるものの、Milly の内面には貞節・従順・自己犠牲という昔ながらの美德が存在しているように描かれている。Glasgow は Milly に罪の意識を持たせることなく内面の純潔を描き、悪女の汚名を取り除こうとした。Littlepage 氏に「過去の女性の経験からなんら学んでいないではないか」と人生で失敗したかのように指摘されて、Milly はきっぱりと言う。「いいえ。私たちは自分たちで真実を学ばなければならないんです。過去の世代が教えてくれることはなんの役にも立たないのです」(40)。さらに「年老いた人たちは若者の行く手に立ちはだかることは出来ないのだということを学ばねばならないのです」(251) とする。新しい世代の女性 Milly は過去の因習と決別し、新たに自分自身の真実を見つけだそうとする。

Milly の恋人を結果奪うことになった Littlepage 氏最愛の娘 Mary Victoria は Milly と対局をなす理想主義にもえる美しく聡明な南部女性として描かれている。しかし Glasgow はこの Mary Victoria を Marmaduke によって痛烈に批判する。つまり、南部女性達は彼女達の理想のもとで戦争を正当化していると言うのだ。彼女達はすべての戦争は野蛮であると言いながら、南北戦争、スペイン戦争、第一次世界大戦だけは例外であると考えている (111)。特に第一次世界大戦へのアメリカの参戦は「戦争を終わらせるためばかりか、道徳的理想主義を維持する戦争」(111) だと考えているのだ。Mary Victoria はまるで戦争が彼女の大好きな慈善であるかのようにヨーロッパで生き生きと活動していると批判する (110)。Marmaduke の批判は即ち当時社会活動に従事していた中流階級の新しい南部女性に対する Glasgow 自身の批判でもある。

作家を志す Martin は外見的には美しいが内面的には軟弱で頼りにならない男性として描かれ、最後には Mary Victoria の支配から逃げ出してしまふ。結局 Milly も Mary Victoria も Martin と幸せな結婚生活を持つまでにはいたらない。両者に同じ結果を与えることで、Glasgow は妊娠して後に残された Mary Victoria も「墮ちた女」になったことを暗示している。しかしどちらも「墮ちた女」として Aunt Agatha や Dalrymple 夫人のように人生に失敗した

様子はなく、「傷つきはしたが挫折することのない」(301) 女性達として描出されている。Mary Victoria は Martin が家を出たことがわかり、Milly のもとへ彼が戻ったかどうかを確かめに行く。この時一人の男性を共有した二人の「新しい女性」は始めて対峙する。Milly は「彼が本当に望んだのは孤独だった」(301) と、Martin がヒマラヤに行ったかも知れないことを言う。女性に所有されることから逃れたかった Martin に捨てられた「墮ちた女」たちは男性に頼らずに生きていこうとする様子を Glasgow はつぎのように描いている。

“I want him to be happy,” she [Mary Victoria] was saying, in a tone of exalted emotion. “If you can make him happier than I can, I am ready—I am willing—”. . . Then she [Milly] answered quickly, almost fiercely, with a hard little laugh . . . “But I don’t want him. I thought I wanted him until I saw him, and then I knew I didn’t. He doesn’t want me, he wants loneliness. And I—oh, what I want is something worth loving!” (301)

さらに Milly は Martin ときっぱりと決別し、ニューヨークへひとり移り住むことを次のように告げる。

“Yes, I am happy.”. . . “Just because I am free. Just because I am free to begin everything again.”. . . “But the whole world is mine, and in the whole world there must be something worth loving.” (303)

Mary Victoria も Martin に未練はない。「例え帰って来たとしても元には戻らないわ」(303) と言い、次のように新しい南部女性の強さを表現する。“Even though I have lost love, I may still become a power for good in the life of my child” (350) .

Littlepage 氏は時代の変化を感じながら次のように思う。「結局 2 つの時代 [1890年代と1920年代] において女性達に違いがあったのだろうか」(17)。つまり外面的には確かに女性達に変化は見られる。しかし「Milly の平らな胸のうちの心と Dalrymple 夫人のかつては豊かであった胸のうちの心とでは、どれほどの違いがあるというのか」(17)。「墮ちた女」たちの実体にどのような変化があったのであろうか？「墮ちた女」たちはどの時代にも同じように存在していたのである。Aunt Agatha、Dalrymple 夫人そして Milly らの「墮ちた」実体にはなんの違もない。女性たちを取り巻く共同体の規範に変化があり、その規範に拘束される女性たちの意識に変化があったのである。女性たちの実体は時代が変わっても常に同じなのである。作品冒頭で Littlepage 氏は「墮ちた女」という神話を作り出したのは男だったのだろうかとのように考える。

For the decadence of Europe was slowly undermining Virginian tradition, and even the southern gentleman, he told himself, was beginning to suspect that ruined woman is an invention of man. (18)

この Littlepage 氏の疑問に答えるかのように Marmaduke は Littlepage 夫人と次のように対話する。

“But doesn’t she [Milly] know that, in the eyes of the world at least, she is a ruined woman?” “My dear sister, she doesn’t even suspect it Whether you

realize it or not, being ruined is not a biological fact but a state of mind. It may sound paradoxical to any survivor of the nineteenth century, but Milly has proved to me that it is impossible to ruin a woman as long as she isn't aware of it. What really ruined poor Aunt Agatha—yes, and Mrs. Dalrymple, too—was not a fall from virtue but Victorian psychology. You—by what I mean public opinion in Queenborough and elsewhere—were inoculated with the Puritan virus.” (184-185)

「墮ちた女」とは生物学的事実ではなく、心の状態を示すものである。Aunt Agatha や Dalrymple 夫人はヴィクトリア朝の心性から見れば墮落したと言えるが、人間としての美徳からはなんら墮落していないと Marmaduke は語る。「墮ちた女」をつくり出したのは社会通念であり、女性達の行動に時代を超えた相違はなかったのである。「墮ちた女」の神話は虚構でしかない。「墮ちた女」は時代を超えて存在する事実であり、社会の受け止め方、あるいは本人の意識が「墮ちた女」の神話をつくり出すのである。Milly と Marmaduke はヴィクトリア朝の心性から完全に脱却しており、Littlepage 氏は伝統的社会通念のゆらぎを感じながら、徐々にその事実を認識しつつあるように描かれているのである。

Glasgow は「墮ちた女」たちを描きながら、1920年代 Virginia 州の小さな町 Queenborough で、それまでの伝統的道德規範が崩れていく様子を描こうとした。古い因習から自由になり、力強く生きようとする「墮ちた女」たちを描きながら、南部の道德革命の現象を提示した。しかしながら「フラッパー」という新たな神話の主人公にされそうな「墮ちた女」たちに変わらない南部女性の貞節、意志の強さ、潔さを描き、南部女性の新しい典型を示したのである。同時に、Burden 夫人のような人物を描きながら、伝統的南部規範がかたくなに残存していく様子も示したのである。

Glasgow は若い頃に近所で「墮ちた女」といわれる人たちを見てきたと言う (Ekman 84)。閉じこめられた彼女たちの暮らしぶりは幼かった Glasgow には奇妙に見えたにちがいない。社会・共同体と個人との関係を生涯のテーマとしていた Glasgow は「墮ちた女」たちが新しい時代の風を受け、因習に閉じ込められることなく、「新しい女性」として逞しく自立して生きていく様子を示した。Glasgow は常に女性達をヴィクトリア朝時代の「女らしさ」の神話と呪縛から解放しようとしてきたのである。They Stood to Folly においても、新しい時代の意識に支えられた Glasgow は、生涯罪を背負って生きていかねばならなかった「墮ちた女」たちを、ペンをもって南部の因習から解放しようとした。南部の伝統的規範の中で悪女とされていた女性達はその境界を越え、「新しい女」として逞しく生きていくことを Glasgow は願っていたのであろう。

注

¹Glasgow, *A Certain Measure*, 211-212. 三部作であることが次のように述べられている。

It (*The Romantic Comedians*) was the first of three comedies or tragicomedies, that I had placed in my Queenborough, Virginia. For this trilogy, I felt that I required the distilled essence of all Virginia cities rather than the speaking likeness of one.

作品は出版年順に *The Romantic Comedians* (1926), *They Stooped to Folly* (1929), *The Sheltered Life* (1932) である。

²Glasgow, *They Stooped to Folly* (1929; New York: Charles Scribner's Sons, 1938), xii.

この作品からの引用はすべてこの版に基づき、以後、引用箇所は括弧内に頁数を示す。

³サンドラ・ギルバート/スーザン・グーバー著『屋根裏の狂女』5-63。男性作家が生み出した「天使」と「妖怪」という極端に分化した女性のステレオタイプ像について鋭い指摘がある。

引用文献

Ekman, Barbro. *The End of a Legend: Ellen Glasgow's History of Southern Women*. Stockholm: Uppsala, 1979.

Freedman, Estelle B. "The New Woman: Changing Views of Women in the 1920s." *History of Women in the United States; historical articles on women's lives and activities*. Edited by Nancy F. Cott. Vol.1. Munich: A Reed Reberence Publishing Company, 1992.

Glasgow, Ellen. *A Certain Measure*. 1938. New York: Harcourt, 1943.

———. *They Stooped to Folly*. 1929. New York: Charles Scribner's Sons, 1938.

Scott, Anne Firor. *The Southern Lady: From Pedestal to Politics 1830-1930*. Chicago: Chicago UP, 1970.

Scura, Dorothy. *Ellen Glasgow: The Contemporary Reviews*. New York: Cambridge UP, 1992.

小笠原垂衣「〈母殺し〉の欲望：1920年代と *The Sun Also Rises*」『アメリカ文学研究』第35号，1999年，75-88頁。

サンドラ・ギルバート/スーザン・グーバー『屋根裏の狂女-ブロンテと共に』山田晴子/藺田美和子訳，朝日出版社，1986年。

メアリー・ベス・ノートン他 第24章「1920年代-新時代の幕開け」、『アメリカの歴史4-アメリカ社会と第一次世界大戦：19世紀末-20世紀』本田創造監修，三省堂，1996年，259-317頁。